

国語科を中心とした低学年の授業づくり III

大岸 啓子

1. はじめに

本稿は「国語科を中心とした低学年の授業づくりⅡ」（平成24年度海星女子学院大学研究紀要）の続編である。第1学年での実践Ⅰ・Ⅱについては、平成23年度・平成24年度の本学研究紀要を参照されたい。

本稿では、第1学年に引き続いて担任となった2年生の子どもたちの実態と学級目標、教師の願い、授業づくりの実践について述べていくことにする。

2. 学級目標と教師の願い

(1) 学級目標

始業式の日、これからの1年間を今まで以上に高めていかなければならない、と身の引き締まる思いで、子どもたちの前に立った。2年生になって初めての作文の時間、子どもたちは黙々と鉛筆を走らせていたが、どの子の文章にも、進級した喜びや期待が表れていた。

32人の子どもたちは、一人一人が「個」としての良さを持ち、もっと向上していこうとする意欲もあった。しかし、自分にできることを自主的に取り組んだり、自分の考えで行動したりしようとする力は、まだ不十分であった。また、自分から友だちに働きかけていくことや、友だちと一緒に学んでいくことの意義を認識している子も少なかった。

このような実態をとらえ、学級目標として「ひびき合うために——①自分で判断しよう。②みんなの力を集めよう」を設定した。

①は友だちとの関わりの中で、自分を鍛えながら、自分で判断する力の育成を目指し、②は「学級」の中で、自分の意見を主張するだけでなく、友だちの考えを聞き合い、お互

いの立場や気持ちを思いやる子の育成を目指したのである。

なお、教師としての願いは次のような内容であった。子どもたちの願い（勉強がもっと分かりたい。いろいろなことができるようになりたい。楽しいクラスがいい。友だちと仲良くしたい）が叶う学級でありたい。友だちと一緒に勉強したら分かるようになった、みんなで考えを出し合うってこんなに楽しいことなんだ、と実感できる学級をつくっていかうとしたのである。

自分自身の良さを実感させ、個性を伸ばし、自信をもたせながら、子どもたちを伸ばしていくのが、教師の大切な仕事の一つである。

子どもたちが生き生きとした顔で教室に入ってきているか、教室が心の居場所になっているかは、子どもたちの姿が全てを物語っている。担任の願いを込めて、学級だよりの名前を「シンフォニー」とし、32人が奏でる楽器がひびき合う学級づくりを進めていった。

(2) 話し合い、聞き合う学級に

友だちをいろいろな角度から見つめて、もっと分かり合おうとするための取組から、2つの例について次に述べる。

① 朝の会・終わりの会

2つの会の目当てを「友だちのいいところを認める。友だちのことを分かろうとする」とした。また、自分の仕事に責任と自覚を持ち、主体的に行動するために、日番は一人で担当させることにした。

朝の会

健康観察カード（自分の健康チェック）記入や欠席調べの後、スピーチをする。32人いるので、一つのテーマが終わるまでに1か月

以上かかるが、自分のスピーチに対する自覚をもつようになる。聞き手は、スピーチの内容を受けて質問をする。話し手の立場では、どのように話せば、自分の思いを友だちに伝えることができるのか、話し方を工夫する必要に迫られる。

＜朝の会のスピーチの年間計画＞

・4月～5月のテーマ

「楽しいときは、こんなとき」

自分のいちばん楽しいときを話す。友だちと遊ぶときが楽しいということから遊び方に目を向けていく。

・5月～6月のテーマ

「見つけたよ、不思議だよ」

見つけたものや不思議だと思うことについて話す。普段は気にしていないことから、新しい発見や感動がある。

・6月～7月のテーマ

「宝物は？」

大事にしているものを紹介する。大事なものは何なのか、自分を振り返る機会とする。

・7月～9月のテーマ

「こんなニュースがあったよ」

テレビや新聞から、紹介する内容を選ぶ。社会に目を向けるきっかけとなる。

・9月～10月のテーマ

「家族の紹介コーナー」

家の人に視点を当てる。家族がいるから自分が存在していることを意識する。

・10月～11月のテーマ

「こんな本を読んだよ」

読書の秋ということから、読んだ本の感想や紹介をする。

・11月～12月のテーマ

「自分の頑張っていること、いいところ」

自分自身の発見である。頑張っていることなどを紹介する。聞き手の共感が大事である。

・1月～2月のテーマ

「わたしの名前、ぼくの名前」

自分の名前は、誰がどんな願いをもつて付けたのかを紹介し合う。

・2月～3月のテーマ

「2年生で心に残ったことは」

1年間を振り返り、一番心に残ったことを話す。

終わりの会

1日を振り返り、嬉しかったこと、頑張っていた友だちのことなどを発表する。いろいろな友だちに目を向けるきっかけにもなる。

また、困ったこと、みんなで解決していきたいと思うことがあれば提案させていく。困ったことを発言するだけでは解決しない。問題に対して、自分たちで解決方法を考えることが大切なのである。

聞き手の立場としては、自分には関係のないことだととらえるのではなく、「学級のこととはみんなで考えていこう」と意識することが必要である。無関心からは、人への「やさしさ・あたたかさ」は育まれない。

② 日記

毎日、時間を設定して日記を書く。テーマを決めることもあるが、書きたいことを自由に選ばせることが多かった。教師と書き手の交流だけではなく、何篇かを選んで読み聞かせをしたり、学級だよりで紹介したりした。

そのような取組を経て、友だちに目を向け、仲間の良さが分かってきたことが、日記にも表れるようになっていった。

2年生という学年もあと少しで終わろうとしていた3月18日の日記は、本稿の最後のページに記載している。

3. 「ひびき合う」国語の授業を

「聞く」「話す」「書く」「読む」力を付けるために、1年生からの取組を継承しながら、それぞれの高まりを目指した。さらに、

一人ひとりの考えがひびき合い、思考が深まっていく国語科の授業を創造するために、次の4つを授業の中核に置くことにした。

- ・ 反復されている人物の行動や願いを読み取りながら、読み進めていく。
- ・ 人物の言動や場面を比べる。
- ・ 場面のつながりを考えて、人物の思いを探る。
- ・ 友だちの発言につなげたり、ふくらませたりしていく。

(1) 一人ひとりが考えをもつ

考えをもつための書く活動として、下記の①から⑦の取組を行った。次第に、書くときだけでなく、発表するときにも観点に沿って発言できる子が現れてきた。

例えば、3学期の『光太郎』（光村2年下）の最初の授業のとき、範読を聞いたあとで「先生、この場面、今までとは違って平和や。幸せになってる」と、場面と場面と対比して発表できるようになったことが挙げられる。

考えをもつために「書く」

① 「分かる・分からない」を区別する。

まず、分からないことやみんなで考えたいことを見つける。次に、見つけるだけでなく、自分の考えも書けるようにする。本文に線を引いたり印を付けたりすることは、「ここは分かる」「ここはまだ分からない」を区別する手がかりにもなる。

② 人物の思いが分かる場所を探す

会話文だけでなく、地の文からも人物の思いを探り、言葉のイメージをふくらませていく。人物の心（願い、悲しみ、相手を思う気持ちなど）は繰り返し書かれている。繰り返されるからこそ、強調されているということが分かる。

③ 考えのもとになる根拠を示す

「～と思う、～だからだ」という自分の考えのもとになる言葉や文を提示する。それそ

れが感じ取ったことは否定しないが、表面的な浅い読みに終始しないようにする。「～と書いてあるから、～だと思う」など、理由付けしながら、考えを確かなものにしていく。

④ 言葉や場面を比べる

対比することにより、イメージを深めたり新しい発見をしたりする。比べることにより、物事の本質が見えてくる。

⑤ 反復に目を付ける

反復されていることから、人物像をとらえたり、強調していることを読み取ったりする。

⑥ 仮定して考える

「もし、……だったら」と仮定することにより、人物の言動の意味合いを探る。

⑦ 自分の考えをまとめる

前時までに書いたことや今日の授業の流れを振り返りながら、自分の考えの変化を知る。そして、新たな疑問を引き出していく。

(2) 「話し合う」ことで思考を深める

まず自分で考え、次に考えを出し合っていくことで、さらに思考を深めていく。一つ一つの意見が、薦のように絡み合いながら太くなっていく授業を目指した。

『ふきのとう』（光村2年上）は、2年生になって初めての教材である。ここでは、「類比」と「対比」で授業を進めた。対比しているのは、春風が登場するまでの場面と、その後の場面である。対比していることを見つけるために次のような指示をした。

指示 「二つに分けるとしたら、どこで分けますか。そのわけは～～とノートに書いて、わけを考えなさい」

どこで分けると考えたのか、それぞれの意見を出し合いながら、討論が始まった。子どもたちの意見は、次のように分かれた。

① 「そとが見たいな」のところまで

② P8の「ごんねんそうです」まで

①と②のどちらの意見に賛成なのか、話し合

いをした結果、①派は説得力がなく敗退した。

このような授業の進め方は、負けた・勝ったを競うのではなく、次のようなねらいで設定した。

- ・ ①と②のどちらに賛成するのか、と話し合ううちに、本文の言葉に戻って考えるようになる。
- ・ 「うれしい」「さびしい」という言葉からだけでなく、他の言葉をつないで、「うれしそう」「しょんぼりしている」というイメージを引き出していく。
- ・ 自分の考えを主張するために、本文を分ける理由を探そううちに、考えが深まったり、新しい発見をしたりするようになる。

話し合いの後で、分かったことをノートにまとめさせたところ、Y君は次のように書いていた。

(原文は「竹」と数字のみ、漢字を使用)

<三のところで分ける。そのわけは、三の場面まで、いろいろなことをしていたけど、四の場面のところで、みんなの願いが叶ったことです。それに、三の場面までと、四の場面までと登場人物と数が違います。三の場面までは、ふきのとうと竹やぶだけだったけど、お日様が出てきて明るくなった。>

対比をして三で分かれていることが分かった。三で分けた理由は、一から三までは暗くて、四から六は明るい感じがするというのが分かった。一から三は寂しいような寒いような感じがして、四から六は明るくて、お日様が春風を起こしてくれたから嬉しくて、お日様は優しいということが分かった>

このように、対比することで、文章をさらに深く読める面白さを実感できるようになった。日々の授業を通して、Y君のように自分の考えをきちんと書ける子どもたちも増えていったのである。

次の『スイミー』（光村2年上）では、

「対比」を観点においた授業に取りむことにした。

(3) 対比することから、新しい発見へ

「スイミー」の学習では、場面对比することで、スイミーの思いや置かれている状況の変化がクローズアップされてくる。

① 「スイミー」最初の場面

最初の場面では、スイミーが小さな赤い魚の兄弟たちと楽しく暮らしている。次の場面では、マグロに襲われて兄弟たちは飲み込まれ、スイミーはひとりぼっちになってしまう。最初の場面が平和で幸せそうなので、次の場面でのひとりぼっちのスイミーの悲しさがよく浮かび上がってくる。この二つの場面对比することによって見えてくるものは、スイミーたちが暮らしていた世界は、決して平和なところではなかったことや、ひとりぼっちになったスイミーの深い悲しみである。

② 「スイミー」最後の場面

スイミーたちは結束し、マグロを追い出すことに成功する。また、平和な世界が戻ってきたのだが、最初の場面の平和と同じではない。初めは自分たちを守る方法も知らず、逃げることしかできなかったスイミーと兄弟たちである。

しかし、団結してマグロを追い出した後は、再び襲われることがあっても、逃げるのではなく、自分たちの世界を守るために立ち向かっていく強さをもった集団になっている。

このように、対比することによって、平和の意味の違いをとらえることができる。授業の中で、「最後は平和だけど、スイミーの兄弟たちはもう帰ってこない。本当の兄弟がいる、いないという違いがある」という発表もあった。

次は、A君が書いた「スイミーは、かわったね」という題の終わりの感想である。

(原文は学習済みの漢字のみ使用)

く一の場面はマグロが襲ってきて逃げたけど、兄弟は食べられて、生き残ったのはスイミーだけでかわいそうだったね。でも、六の場面はマグロに食べられなかったんだね。わけは、みんなが一匹の大きな魚みたいに泳げるように練習をしたからだね。一の場面と六の場面のスイミーは変わったね。一の場面の世界は、スイミーがひとりぼっちの世界だけど、六の場面は楽しくて平和な世界だね。それと、大きな魚が襲ってきて、もう食べられない世界だね>

(4) 場面のつながりから、読みを深める

登場人物の言動は、場面のつながりをとらえると、その意味が分かる。『力太郎』（光村2年下）では、「〇の場面で～だったから、～している」「前に～と言ったから、～をしている」という見方ができるような授業を目指すことにした。

じいさまとばあさまの「子どもがほしい」という願いや、「人の役に立ちたい」という力太郎の願いを中心にして授業を進めた。そうすることで、旅に出てからの力太郎の言動の意味を探ることにつながっていった。また、じいさまとばあさまの垢で作った人形に対する慈しみや、「こんぴ太郎」が人間になったときの驚きや喜びに共感することができた。

(5) 自分のノートをつくる

黒板に書かれたことを写すのではなく、子どもたちの思考の記録としての「ノート」づくりを目指した。書くときには、次のような意識するよう指導した。

- ・ 早くきれいに書く。
- ・ 書きたいことをたくさん書く。
- ・ 発表のためのメモをする。
- ・ 文を絵で表し、説明を加える。
- ・ 分かりやすく書くために、線をを使う。
- ・ 結論を書いて、後から理由を書く。

1冊のノートを使い切れば、次のノートを貼って重ねていくようにした。たくさん書くことを目指すため、マス目のない3・4年生用の国語帳を使用した。第2学年の終わりには、授業ノートだけで3冊になる子も現れるようになった。

4. 第2学年7月の授業実践『スイミー』

(1) なかまがいるから幸せなんだね

① なかまっいいな

スイミーの泳ぎがいくら速くても、ずっとひとりぼっちだったら、マグロからいつまで逃げ切ることができただろうか。

ひとりぼっちになったスイミーが海の生き物たちに出会い、元気を取り戻す場面は、体言止めや比喩表現の効果もさることながら、海にすむ生き物たちの美しさ・躍動感にあふれている。「にじいろのゼリーのような」「ドロップみたいな」など、スイミーの目と心を通して見た表現から、スイミーの心情も読み取ることができる。

海の底でスイミーが出会った素晴らしいもの・美しいものたちは、海の世界の生き物たちである。それは、広義な意味での「なかま」とも言えよう。クラゲやウナギたちは、直接的にはスイミーを助けたりはしない。しかし、スイミーとは、見えない力で支え合って生きている。スイミーが自分自身を変革していく重要な役割を担っているのである。

元気を取り戻したスイミーは、小さな赤い魚たちと出会い、逃げるのではなくマグロに立ち向かう方法を考え出していく。赤い魚の「なかま」がいるからこそ「何とかしなくっちゃ」と行動を起こすことができたのである。

また、「昼の輝く光の中を」という言葉には、スイミーたちの団結と希望が内包されている。

それと対比して「朝の冷たい水の中を」という言葉には、出発前の緊張感が内包されて

いる。「なかま」とともに価値のある、しかもみんなが団結しないと達成できない目的に向かって、力を合わせていこうとする決意が表れているのである。

② 個性を生かす

スイミーは「黒い」という個性を生かして、自分の持ち場を選んだ。しかし、黒ければ誰でもが「目」に成り得るわけではない。スイミーが「目」という大事な場所での役割を果たせたのは、スイミーの力である。また、小さな赤い魚だから、集まれば一匹の大きな魚に見せかけることができる。それは、「赤い」という個性を生かしたことになる。それぞれの個性を生かして持ち場を決め、力を結集したからこそ、平和になった世界で、仲間と一緒に生きていくことができるようになったのである。

(2) 指導案

① 教材観

兄弟たちと楽しく暮らしていたスイミーは、マグロに襲われてひとりぼっちになってしまう。平和に見えたスイミーたちの世界は、突然の侵入者に対して、協力して立ち向かうことのできない集団にすぎなかったのである。

寂しく悲しい思いに包まれ、海の底に逃げたスイミーは、海の生き物の美しさや素晴らしさに心を動かされ、元気を取り戻していく。そこには、逆境に負けないで生きていこうとするスイミーの姿が描かれている。

大きな魚を恐れて隠れている赤い魚の兄弟たちを見つけたスイミーは、岩陰から出ることを呼びかける。逃げるだけでは、自分たちの命を守る解決策にならないことを、スイミーは知っているからである。

力を合わせて大きな魚に立ち向かい、真に平和な世界を築いていこうとするスイミーたちの姿を通して、価値ある目的に向かって連帯する素晴らしさを考えさせることができる

作品である。

人は一人で生きているのではなく、多くの人に支えられて生きている。支えられている中で、自分の個性を輝かせて生きていく価値についても気づかせていきたい。

また、ストーリーは短いですが、全文を通して一つ一つの言葉が効果的に使われている。常体の文章の展開や倒置法、比喩、体言止め、反復などの表現方法からも、海の世界の情景や人物の思いをとらえさせていきたい。

② 児童観 (略)

③ 指導観

人物の心が分かる言葉を探すことから学習を進めていく。言葉のイメージを探りながら、その言葉で表現されている人物の思いや作品の世界をとらえさせていきたい。

場面によって変化するスイミーの言動を対比することで、スイミーが変革していくわけを考え、人物像を浮かび上がらせていきたい。

また、常体や体言止めの手法などから、スイミーの人物像をとらえ、比喩から海の世界の美しさやスイミーの思いを探らせていく。また、一つの言葉から引き出されるイメージは、その言葉を使うことにより、人物の心情が表れていくことにも気づかせていきたい。

逃げることで自分を守ろうとしたスイミーが、悲しみを乗り越え、仲間とともに運命を切り開いていく過程を共体験することで、価値ある目的に立ち向かっていく意義についても考えさせていきたい。

さらに、目になるのは黒いからだけではなく、スイミーの個性が生きる場であることにも気づかせていきたい。そして、みんなの協力があってこそ、スイミーも仲間とともに平和な世界で生きていけるようになったことをとらえさせていきたい。

④ 指導目標

- 海の生き物や仲間との出会いによって、変革していくスイミーの人物像を

読み取ることができる。

- 言葉や表現方法から、イメージを引き出すことができる。
- 「書く」「音読する」「話す」ことによって、読みを深めることができる。

⑤ 指導計画（全15時間）

- 第1次 読みの違いを比べる。（3）
- 第2次 海の世界の様子と人物の変化を読み取る。（7）
- 第3次 読み深めたことをまとめる。（3）
- 第4次 言葉の学習をする。（2）

（3）「スイミー」のノートから

子どもたちが授業を通して、どんなことを考えたのか、終わりの感想で6ページも書いたYさんのノートを見てみよう。次は、その中の一部分である。

（原文は学習済みの漢字のみ使用。）

<一の場面はスイミーだけ逃げている、力を合わせなかったけれど、六の場面だったら、力がいっぱい大きな魚を追い出せたね。一の場面と六の場面はちょっと違うね>

<スイミーはいろいろ考えて、いい考えを選んで、大きな魚を追い出せてよかったね。また、楽しくて平和な世界が返ってきたね。スイミー、よかったね。前とちょっと違って、すごく楽しくて平和な世界になってよかったね。マグロが襲ってきても、練習しているから、もう大丈夫だね。ほかの大きな魚が襲ってきても、海で一番大きな魚のふりをしたら追い出せるから、大丈夫だよね>

<赤い小さな魚の仲間たちも力を合わせて、大きな魚のふりを一生懸命してできたね。あんなにたくさんいるのにすごいね。スイミーだけでなく、赤い小さな仲間も頑張っていたね。もし、一匹でも自分の場所から動いたら見つかって、スイミーも食べられてしまうかもしれないからね>

<スイミーと赤い小さな仲間とみんなの力が集まっているんだね。みんなの力が集まるということは、頑張ってる心がつながっているんだね。心がつながっているから、大きな魚を追い出せたんだね。離れ離れにならないで、持ち場も守れたんだね>

最初の場面と最後の場面を比べて「平和」に違いがあること、スイミーだけではなく赤い小さな魚たちの頑張りにも目を向け、「もしも」と仮定して考えていることなど、Yさんの読みの深まりが分かる。

5. 第2学年2月の授業実践『力太郎』

（1）指導案

① 教材観

「力太郎」は、長い年月をかけて語り継がれてきた民話である。貧しく苦しい生活を強いられながら生きている人々の願いが描かれている。じいさまとばあさまは、めったに風呂にも入れないほどの貧しさの中で、支え合って生きている。二人の垢で作った人形に名前を付け、命あるものに対するように世話をしようとする。逆境にあっても、他を思いやる心の温かさを忘れないじいさまとばあさまだからこそ、力太郎が登場し、二人の願いが叶うのであろう。

ストーリーの展開はダイナミックであり、読み手を引き付ける。民話独特の語り口や場面の情景を生き生きと映し出す声喩の効果、反復されている展開の面白さなどから、イメージ豊かに読み進めることができる作品である。力太郎とともに生きる人々との心の通い合いを読み取りながら、平和な世界で幸せに生きたいという民衆の強い願いにも気付かせていきたい。

② 児童観（略）

③ 指導観

一人ひとりが考えをもつために書く活動を取り入れていく。書くことを通して、文や言

葉に立ち止まったり、考えを広げたりする契機になることを願っている。それぞれの考えや疑問点を出し合いながら、読みを深めていきたい。「わしわし」「のっしじゃんが」などの声喩や民話独特の語り口から、その言葉を使って描かれている人物の姿を浮かび上がらせたい。

時間の流れや場所の転換を表している言葉に目を向けたり、場面を比べたりすることからも、力太郎の言動の意味を探っていきたい。化け物と戦う場面では、化け物の恐ろしさを引き出し、人々の苦しみをとらえることから、力太郎の行動に共感させていきたい。

そして、村や町の人々のために尽くし、みんなが平和に暮らせるようになった後で自分自身の幸せを得たことから、力太郎の人物像を広げていきたい。

また、音読することを、人物の行動に同化したり、場面の情景を描いたりする手立ての一つとしたい。読みを深めた内容が聞き手に伝わるように音読で表現しながら、言葉のもつ美しさをとらえることも期待している。

④ 指導目標

- 幸せに平和に暮らしたいという人々の願いを読み取ることができる。
- 語り口や声喩などから、民話のもつ面白さをとらえることができる。
- 人物の思いや場面の情景をイメージ化しながら音読することができる。

⑤ 指導計画（全14時間）

- 第1次 読みの違いを比べる。（2）
- 第2次 力太郎の言動を追いながら、人々の願いを読み取る。（8）
- 第3次 読みを深めたことをまとめる。（2）
- 第4次 昔話を読む。（2）

（2）「力太郎」のノートから

「力太郎」では、どんなことに疑問をもち、

何を考え、どのような新しい発見をしていったのだろうか。Sさんのノートから学習を振り返ってみることにする。なお、文章は、登場人物になったつもりで書いている。

（原文は学習済みの漢字のみ使用。）

① 空びつの中の娘は

<心配だな。ちゃんと3人でやっつけてくれるかな。だけど、あの3人は強いからきつとやっつけてくれるよね。だけど、化け物は強いからやっつけられるかな。3人は強いから絶対、化け物に勝てる。わたしは信じる。絶対に勝ってくれる。3人がやっつけてくれたら、町の人も村の人も喜ぶだろうな。3人は力持ちだから絶対に勝てる。絶対に>

② 空びつの前に座った力太郎は

<絶対に勝ってみせる。あねこを助けてみせる。化け物を退治してみせる。3人の力を合わせて、あねこを守ってみせる。3人の力を合わせて化け物を退治して、あねこを守ってみせる。みどうっこ太郎もそう思っているだろう。石こ太郎も化け物に勝つと思っているだろう。みどうっこ太郎は庭でやっつけてくれるだろう。やっつけられなかったら、石こ太郎もやっつけられなかったら、おらが相手するぞ。絶対に負けられないぞ。絶対に化け物を退治してみせる>

③ 化け物を退治した力太郎は

<化け物を退治できたぞ。あねことの約束を守れたぞ。また町も村も平和が戻ってくるぞ。みどうっこ太郎も石こ太郎も出てきたし、あねこも助かった。さらわれたあねこたちも嬉しいだろうな。おらたちもいつまでも平和でいられるぞ。じいさまばあさまきつと喜んでいられるだろうな。村の田畑も荒らされずにすんで、食べ物が少ない心配の必要もなくなったぞ。だけど働かなくっちゃ。あねこは、大きな大きな化け物と言っておったが、おらにはあんまり大きく見えなかったな>

6. 輝く子どもたち

授業を通して、また友だちとの関わりの中で、子どもたちは日に日に成長していった。それぞれが自分を磨き、輝かせていったのである。

終業式まであと6日という3月18日の日記にNさんとTさんは、次のようなことを書いていた。

「友だちいっぱい」Nさん
 <なんで、友だちなんだろう。このクラスは、なかのいい子ばかりいるからかな。先生も友だちで、ペンキょうも友だち。友だちがいっぱいいる。2年生のクラスは、友だちがどこを見てもいるし、みんなみんな友だち。友だちがいっぱいいるから、どんなピンチでも一生けんめいできるんだね>

「もしねがいが二つかなうとしたら」Tさん
 <もしも、ねがいが二つかなうとしたら、わたしは、よくかんがえた。>

「うーん、なににしようかな」
 わたしは、まよってまよって、やっというアイデアがうかんだ。わたしがかんがえたアイデアの中の一つ目は、このわたしたちの「こうべ」が、せんそうのないゆたかか、のびのびくらせる「こうべ」になってほしいことがねがいです。この「こうべ」は、わたしたちの生まれたところだからです。二つ目は、このクラスと先生が、6年生までいっしょにいて、たのしくペンキょうしたいことです。

このねがいがほんとうにかなったらいいのにな。たのしく2年間くらしななかと、たんになんしてくれた先生と、6年生までいっしょになるのがねがいです>

1年生の4月にはバラバラだったクラスも、2年生の終わりには、上記のような思いをもつ子どもたちに成長し、学級集団としてしっかりまとまっていったのである。

「授業を通して子どもたちを育てる」「授業で子どもたちは変わる」を実感するとともに、多くのことを学んだ2年間であった。

子どもたちは「鏡」のような存在である。一人ひとりの表情・発言・行動は、教師の姿を映し出している。何が写っているのかをしっかりと見極める力が、教師に求められている。

参考文献

- (1) 今井鑑三監修 国語教師・竹の会 (1985)
『国語科授業の新展開 16 国語科よい授業の追究』明治図書
- (2) 川野理夫 (1989)
『小学校 文学作品の授業 よみを深める指導の実践④ 1・2年』あゆみ出版
- (3) 渋谷孝・市毛勝雄編著 (1987)
『読み方授業のための教材分析 小学1・2年』明治図書
- (4) 西郷竹彦編 (1969)
『シリーズ・民話と教育 2巻 民話の教材分析と授業』明治図書
- (5) 西郷竹彦編 (1969)
『シリーズ・民話と教育 3巻 民話の世界・民話の理論』明治図書
- (6) 西郷竹彦編集 (1984)
『文芸教育 41号』明治図書
- (7) 西郷竹彦 (1987)
『教科書指導ハンドブック 子どもの見方・考え方を育てる 2年の国語 小学校【光村版】指導書』明治図書
- (8) 野口芳宏 (1987)
『小学校国語科授業技術全書 3 話せない子・話さない子の指導』明治図書
- (9) 野口芳宏 (1986)
『国語科授業の新展開 25 国語科教室の活性化 小学校編』明治図書

